

春の真昼

小川未明

青空文庫

のどかな、あたたかい日のことでありました。静かな道で、みみずが唄をうたっていました。

田舎のことでもありますから、めったに人のくる足音もしなかつたから、みみずは、安心して、自分のすきな唄をうたっていました。

「おれほど、こう長く、息のつづくうまい歌い手は、世間にそうはないだろう。」と、心のうちで自慢していました。

あたたかな春風は、そよそよと空を吹いて、野原や、田の上を渡っていました。ほんとうに、いい天気でありました。あたりのものは、みんな、みみずの鳴き声にききとれているように、だ

まっつて、ほかに音おとがなかつたのです。

このとき、ふいに、田たの中なかから、コロ、コロ、といつて、かえるが鳴なき出だしました。

「はてな、なんの音おとだろう？」と、みみずは、ちよつと声こえを止とめて、その音おとに耳みみをすましましたが、すぐに、あの不器量ぶきりようなかえるの鳴なく声こえだとわかりましたから、

「かえるのやつめが、負けぬ気きでうたい出だしたわい。」と、みみずは、それを気きにもかけぬというふうで、ふたたび唄うたをうたいつづけたのであります。

かえるも、なかなかよくうたいました。水みずの中なかから頭あたまを出だして、うららかにてらす太陽たいようを見上みあげて、思おもいきり、ほがらかな調ちよう

子でのどを鳴らしたのでした。

「あの日蔭者の陰気な唄と、私の唄とくらべものになるかい。お日さまにうかがってみても、どちらが上手かわかることだ。」と、かえるは、ひとり言をしたのでした。

けれど、お日さまは、もとより、どちらがうまいなどは、いわれなかつたのです。

「みみずも、かえるも、よくうたっているな。」と、目もとにほえんで、地上を見下ろしているばかりでした。

みみずは、思いきり息を長く引いて、ジーイ、ジーイ、といい、かえるは、太く、短く、コロ、コロ、といって、うたっていました。

ちようど、そこへ、どこからか二羽のつばめが、飛んできて、
電線にとまると、ふたりの唄に耳を傾けたのです。

「ああ、なんとというやさしい唄の声だろう……。」「と、一羽のつばめは、いいました。

「ああ、なんとという春の日にふさわしい、陽気な、ほがらかな鳴き声だろう……。」「と、ほかのつばめはいいました。

甲のつばめは、みみずの唄をいいといい、乙のつばめはかえるの鳴き声をいいといいました。そしてこんどは、いつか、二羽のつばめが、争いはじめたのです。

「あの、コロ、コロ、いう鳴き声は、私が、ここから遠い、東の方の町を飛んでいるときに、白壁の倉のある、古い、大きな酒

屋があつた。つい入つてみる氣になつて、ひさしから奥へはいると、美しいお嬢さんが、琴を弾じていた。ちようど、そのとき聞いた、美妙な琴の音を思い出す。「と、乙のつばめは、かえるの鳴き声をほめました。すると、甲のつばめは、
 「私は、去年の夏の日、北方の青い、青い森の中を飛んでいました。そのとき、木の枝にからんだ、つたの葉の上に止まつて、なんとという虫かしらないが、細かい、かすかな、やさしい声で唄をうたつていた、その音色を忘れることができない。いま、きこえる、あの音は、まったくそのままであります。」といつて、みみずの唄をほめたのでした。

どちらが、いいかわるいかといつて、二羽のつばめが、電線

の上で、かまびすしく争あらそっていたときに、その下を、この近くちかの村むらにすんでいる、くろねとおが通りかかりました。

「なにを、おまえたちは、そこで、やかましくいつているのだ？」
といつて、ねこは、立たちどまつて、上うへを仰あおいだのです。

甲こう、乙おつのつばめは、かえるとみみずの唄うたから争あらそっていることを話はなしました。いつになく、くろねとおは機嫌きげんがよく、のどをゴロ、ゴロぼまならして、ふとつた足あしで、肩かたをいからしながら、二、三歩前ぼまえへ大おおまたに歩あるきました。

「どれ、私わたしが、どちらがよい声こえだか、判断はんだんしてやろう。」といつて、ごろりと草くさの上うへへねころびました。

二羽わのつばめは、ねこに、判断はんだんを頼たのみました。そして、もし、

甲こうのつばめが負けまたら、乙おつのつばめをいいところへ案内あんないし、乙おつのつばめが負けまたら、まだ甲こうのつばめが知らしない、景色けしきのいいところへ甲こうをつれてゆく約束やくそくをしましたのでありました。

「私わたしたちは、このあたりを一ひとまわり飛とんできますから、どうか、その間あいだに、みみずの唄うたがいいか、かえるの鳴なき声こえがいいか、よく聞きいて、判断はんだんしてくださいまし。」と、つばめは、ねこに、声こえをかけたのです。

「ニヤオン！」と、くろねこは、答こたえて、ねころびながら、自分じぶんの手足てあしをなめていました。

二羽わのつばめは、大空おおぞらをおもしろそうに飛とんでゆきました。道みちばたでは、あいかかわらず、みみずが、ジーイ、ジーイ、と唄うたを

うたい、田たの中なかでは、かえるが、根気こんきよく、お日ひさまを見上みあげながら、コロ、コロ、といつて鳴ないていたのでした。

つばめは、そのあたりをひと一まわりして、もどつてきますと、ねこは、いびきをかいて、グウグウ眠ねむり入いっていました。

二羽わのつばめは、いくら起おこそうとして、電線でんせんの上うえから叫さけびましたけれど、ねこは、目めをさしませんでした。

そのとき、一ひとぴきのとんぼが、ここへ飛とんできました。とんぼは、広ひろい世界せかいへ生うまれ出でてから、まだ間まがありません。うすい絹きぬのように輝かがやきのある羽はねをひらめかしていました。

「なにをそんなに騒さわいでいなさるのですか？」と、とんぼは、いきました。

つばめは、ねこを起こそうとしていることを告げました。

「私が、起こしてあげましょう……。」「と、とんぼはいった。

「ねこをですか？ あなたが……。」「

小さな、とんぼを見ながら、つばめは、目を円くみはったので

す。

「私は、身が軽く、すばしこいから、だいじょうぶ、ねこになど

捕らえられるようなことはありません。」「と、とんぼは答えまし

た。

とんぼは、下へ降りてゆきました。そして、ねこの頭の上へと

まろうとして、やめて、大胆に、鼻の先へとまつたのです。猫

は、びっくりして、目をさますと、とんぼが、鼻の上にとまって

いるので、生意気な、おれをばかにしているなど、火のように怒り、ひとつかみにしようとしたが、とんぼは、ひよいと飛びたつたので、くろねこは、おどりがつてとんぼを捕らえようとした。もうすこしで、とんぼは捕らえられるところを危うく逃げてしまいました。その拍子に、ねこは、田の中へ落ちました。これを電線の上で見つづけたつばめは、どんなに小さな胸をとどろかせたことでしょう。かえるは、水の中にもぐり込み、みみずは、だまつてしまいました。ただ、うららかな春の太陽だけが、静かな空に、にこやかに笑っていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 6」講談社

1977（昭和52）年4月10日第1刷

底本の親本：「未明童話集 4」丸善

1930（昭和5）年7月

※表題は底本では、「春《はる》の真昼《まひる》」となつています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：栗田美恵子

2018年3月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春の真昼

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>